

二 次の記事を読み、後の問に答えよ。

十七世紀のオランダにおいては、新しいジャンルとして①都市風景も数多く描かれた。フェルメールの名作「デルフト眺望」のような町全体の眺めを描いたものから、著名な教会堂の外観や内部、あるいは大勢の人々の集まる市場、広場などの情景である。この傾向は、ヨーロッパの他の諸国にも広まり、カナレットやグアルデイのヴェネツィア風景のように、観光客に人気のある都市の景観を描き出した多くの作品が生まれた。それらは、市民たちに愛好されたと同時に、ア今日の名所絵はがきのように、旅行者たちの土産物として広く流通した。描かれる主題は、これも現在の絵はがきと同じく、宮殿、教会堂、記念碑などの人工のモニュメントである。

ところが同じように観光土産として大量に作られた広重の『名所江戸百景』のシリーズを見てみると、建造物は主役としてはほとんど登場していない。描き出されるのは、亀戸の梅屋敷や藤棚、堀切の花菖蒲、千駄木の桜、その他もっぱら自然の情景である。当時すでに百万都市であった江戸においても、人々の目は何よりも自然に向けられていたのである。

自然との結びつきという点では、日本の建築そのものが構造的に自然に向かつて開かれている。建物の内部と外部が連続しているため、しばしばその間の境界が曖昧となり、内部とも外部ともつかない、いわば中間領域とも言わなければならない。②軒下と呼ばれる部分などその代表的なものである。

日本の伊勢神宮とアテネのアクロポリスの丘にあるパルテノン神殿とは、外観上よく似た形状を見せている。もちろん、一方は木造で他方は石造という素材の違いがあるし、スケールの上でも大きな差があるが、柱を主要な支持材としてその上に横材を渡し、三角形の断面を見せる切妻型の屋根をかけるという構造は基本的に同一であり、したがって形状も似たようなものとなる。だがそこには、一つだけ大きな違いがある。パルテノン神殿の屋根は建物の平面を覆うところで終わっているが、伊勢神宮の場合、軒先がさらに大きく伸びている点である。その結果、ギリシア神殿には見られない軒下という空間が生じる。③このことは、伊勢神宮だけに限らず、一般に日本建築の大きな特徴である。(中国の建物にも軒下部分があるが、日本の場合ほど深くはない。)

このことは、日本には雨が多いという風土的特性に由来するものであるが、そのようにして生まれてきたこの空間が内部か外部かという点と、④そのあたりが微妙なのである。それは家の中から見れば一応外部空間ということになるのであるが、そこが物置代わりに使われていたりするのを外から見れば、むしろ内部空間に付属するものとして捉えられる。現に、庭師たちは、軒下のことを「軒内」と呼ぶ。外部空間で働く庭師たちにとっては、それは内部に属するものなのである。

このような中間領域として、ほかにもたとえば縁、渡り廊下のようなものがある。壁という強固な物理的遮り物によって内部と外部を明確に区分する西欧建築とは違って、日本の建築では、これらの中間領域を媒介として、内部は自然に外部へつながっているのである。

イはなはだ興味深いことに、このように内部と外部が連続している空間の中に住みながら、それにもかかわらず——というよりもむしろ、それであるからこそ——日本人は住まい方において、⑤内と外とを厳しく区別するという行動様式を示す。最もはつきりしたその現れは、家の中に入るときには靴(または下駄でも草履でも同じことだが)を脱ぐという習慣である。今日のように鉄筋コンクリートのマンションに椅子とテーブルの生活という洋式を採用しているところでも、まずほとんどの日本人はこの風習を守り続けているであろう。もちろん、西欧社会でも、家に帰れば内履きに履き替えるということはよくあるが、それは私的な環境でくつろぐためであって、ウお客を迎えるときはきちんと靴を履き、客も靴のまま家の中に入って少しも怪しまない。だが日本ではお客に対しても靴を脱ぐことを当然のこととして要求するので、慣れない外国人は当惑することになる。空間構造はつながっているように見えながら、行動様式では内と外は明確に区別されているのである。

このことは、間仕切りの曖昧な家の中においても同じである。お客に対して、靴の代わりに室内用のスリッパを提供するというのは、今ではごく普通に行われている。だがそのスリッパも、板の間や廊下ならよいが、畳の座敷に上がるときは再び脱がされる。というよりも、普通の日本人なら、スリッパのまま畳の部屋に入ることには、大きな抵抗感があるであろう。あるいは、たいていの家では、便所にはまた別の専用のスリッパがあつて、そこでまた履き替えるということになる。日本人にとっては、それはごく当たり前のことだが、西洋人にはそのような感覚がないから、便所のスリッパのまま畳の部屋に入り込んで主人を慌てさせたりするのである。

このような⑥家の内と外、部屋の内と外の区別が、物理的というよりもむしろ心理的なものである。つまりそれは、意識の問題であり、価値観の問題である。

どの社会にも、聖なる空間を大切にすることがあつて、そのために立派な教会堂や荘厳な神社が建てられる。だが西

欧の教会建築は壁によって内外の区別がはっきりしており、壁の内部は聖なる場所で、壁の外は俗世間ということが形の上でも明確だが、日本の神社で聖なる空間を示すものは、物理的には境界として何の役にも立たない鳥居である。つまり一歩鳥居をくぐれば神の空間であるというのは、もっぱら我々の意識の問題なのである。

似たような例として、お寺や日本式料亭の庭の飛び石の上に、時に、十文字に縄をかけた小さな石が置かれていることがある。これは関守石と呼ばれるもので、ここから先は立ち入り禁止というしるしである。だがこれも、その気になれば簡単にまたいでいけるもので、物理的には何の障害にもならない。関守石の存在によって空間が区別されるのは、我々の意識の中においてである。

このように、目に見えない形で内外の区別が成立するためには、鳥居や関守石の意味についての共通の理解を前提とする。その共通の理解を持った集団、ないしは共同体が日本人にとっては「身内」であり「仲間」であって、その外にいる者は「よそ者」ということになる。日本の家がしばしば「うち」と呼ばれるように、家族は「身内」の代表的なものであるが、時と場合によっては、それは地域社会であったり職場の組織であったりする。サラリーマンが「うちの会社」と言うときは、会社全体が「身内」である。つまり「身内」は、ある関係性の中で成立するもので、そのことが、⑦日本人の行動様式を外国人にわかりにくいものにしていてと言つてよいであろう。関係性は時によって変わるものだからである。

空間的な内部を意味する「うち」という言葉が「身内」のように人間どうしの関係性を意味したり、あるいは「朝のうち」に仕事をすると「いう具合に、時間的広がりにも用いられたりすることから明らかのように、日本人にとっては人間社会も空間も時間も関係性という共通した編み目の中に組み入れられている。同じ一つの部屋が、外から人が来れば客間になり、夜になれば寝室となるというのは、住居の空間もまた、人間や時間との関係で意味を変えることを物語っているであろう。

日本人は、そのような関係性の広がりをも、「間」という言葉で呼んだ。「間」とは「広間」「客間」のように空間の広がりでもあり、「昼間」「晴れ間」のように時間的広がりでもあり、また「仲間」のように人間関係の広がりでもある。読み方はさまざまだが、「空間」も「人間」も、そして「世間」も、いずれも「間」という文字を含んでいるのは、決して偶然ではない。そのような関係、エ「間合」を正しく見定めることが、日本人の行動様式の大きな原理である。その計測を誤ると「間が悪い」ことになり、「間違え」を犯すことになる。現在、我々の生活様式は大きく変わりつつあるとはいえず、この「間」の感覚はなお日本人の間に生き続けており、住居の構造や住まい方をも規定している。それはおそらく、日本人の美意識や倫理とも深く結びついているもので、その本質と構造を解明することが日本の文化を理解する大きな鍵となるであろう。

(高階 秀爾 「間」の感覚)

問十

アメリカ人のスミス氏は、二〇二〇年にオリンピックが日本という国で催されることを知り、夏休みに家族で日本に行くことを計画した。どうせならアメリカにあるホテルではなく、日本の伝統的な宿泊施設を利用しようと思い、「旅館」と呼ばれる宿を予約した。

日本を訪れたスミス一家(夫妻、子ども二人)が、初めて旅館に泊まったときの反応を自由に想像して述べよ。ただし、次の条件を満たすこと。

- ① 「水の東西」、または『間』の感覚』で学んだことを踏まえること。
- ② 根拠をあげること。
- ③ 百字以上書くこと。

人間は、ある種の思いがけない体験をすると、それがなぜ起こったかの「仮説」を持ち、仮説から論理的に導かれる「推論」を行い、結果と照合して仮説を「検証」する、という思考回路を採っている。「 的推論」である。それで、赤信号で道路を渡れば交通事故に遭うと、火に手を近づければ火傷をすることを学び、二度としなくなる。このように結果が明白にわかる場合は簡単だが、結果が 曖昧であったり、神秘的に見える体験をしたりすると、思考に狂いが生じてくる場合がある。

(イ) ある晩、友人が夢枕に立って、翌日その人が亡くなった。予知したのか、テレビ番組で知らせてきたのか、超感覚的知覚がはたらいて前もって察知できたのか、夢と死が偶然に一致したのか、とさまざまに思う(「仮説」を持つ)。何か超能力(予知能力やテレパシー)のようなものがあるのかもしれないと思いついてしまふ(「推論」する)と、それによって他のことも説明できるかもしれないと欲張ってあれもこれも強引に解釈する(結果の「検証」を行う)。このような思考の流れの中で無意識のうちに超能力を信じ込んでしまふ二つの事柄が続いて起こると、その解釈に 多くのバイアスが加かるからだ。

(ロ) 仮説を持ち出す段階で「確認バイアス」が入り込む。自分にとつて確かそうな仮説しか思い浮かべないことだ。右の例で言えば、夢と死が偶然に一致したとはとても思えないと簡単に棄却してしまう。どの仮説も等しく考える必要があるのに、初めからある仮説を除外して考えるというバイアスがかかっているのである。

もう一つは、推論の段階で、ある目立つた事柄二つ(AとBとする)が続いて起こると、ただ目立つという理由でその二つを結びつけて(Aが原因でBが起こった)と考える癖がある。この二つに関連(因果関係)があると推論してしまふ傾向で、「関連性の錯覚」あるいは「相関の錯覚」と呼ばれている。夢を見たということとその人が死んだということ、必ず関連があると思いつく心的作用である。単なる偶然の一致(A、Bは無関係)とは考えないのだ。

(ハ) ある仮説に対して、それに合った事例のみで判断してしまい、反証事例を検討しないということがある。例えば、ある事件の犯人がAさんだろうという仮説を持って、日常の振る舞いでも悪いところばかりを思い浮かべてAさん犯人説を 肯定しようとする。犯人がAさんであれば、足を引きずっているはずがないとか、普段段レインコートを着ているのを見たことがない、というようなAさんには 合致しない証拠には目をつむってしまふのだ。これを「肯定性のバイアス」と呼ぶ。一般人は、否定的な情報(「あの人は犯人ではない」)より肯定的な情報(「あの人が犯人だ」)として受け入れる方が精神的負担は小さく利用しやすいので、自然のうちにそちらに傾いた思考をするのである。

もつとも、二つの事柄が相次いで起こった場合、それを関連づけて何らかの学習をするという意味では自然なことであり、危険を避けるには有効で重要な行為とも言える。「熱いストーブに触れば火傷をする」とか「体操をしないで水泳をすると心臓麻痺を起こすことがある。」などで、 生物が持つ本能かもしれない。例えば、鳥はきれいな色をした虫をむしる避けている。きれいな虫には毒があるか、極めて不味いという関連を学んだためだ。(すると毒を持たない虫であっても、姿だけきれいにして鳥から身を守るという生き残り策(擬態という)を考え出している。生物は虚々実々の生き残り戦略を考え出しているのである。)

昔からの諺で「夕焼けなら翌日は晴れ。」とか、「朝虹が出ればやがて雨。」と言われてきた。これらは気象学的にも根拠があり、受け入れられるものである。ところが、「雨乞いをしたら雨が降った。」とか「下弦の月の頃に交通事故が多い。」など根拠がないものがあり、「地震の前にナマズが暴れる。」とか「カマキリはやがて来る冬に降る雪の量を知らずいて卵を産み付ける高さを調節している。」というような本当かどうか調べてみないとわからないものもある。諺は経験則から得られたものだが、原因と結果を取り違えたり、別の原因があつてさまざまな結果を見ているだけのこともあり、よくよく吟味しなければならない。

一般に迷信は、全く関係がない二つを結びつけ、いかにも本当らしく主張することから生まれてくる。「鼻緒が切れたので悪いことが起こる。」から「信心が足りないので」利益が少ない。「まで、何でも関連があるとしてしまうのだ。ジンクスなどもその類いで、「相撲に勝っている間は髭を剃らない。」とか「野球に勝っている間はユニフォームを③センチタクしない。」など、スポーツ選手にジンクスを担ぐ人が多い。気持ちにはわからないでもないけれど、髭を剃り、ユニフォームを洗濯した方が快適な気分が勝負に ノゾめると思うのだが。

このような「関連性の錯覚」に オチイらないための推論の方法がある。Aという事柄(地震が起こった)とBという事柄(ナマズが暴れた)が相次いで起こった場合だけでなく、Aが起こってBが起こらなかつた(地震が起こったがナマズは暴れなかつた)場合、Aが起こらずBだけが起こった(地震は起こらなかつたがナマズが暴れた)場合、AもBも起こらなかつた(地震も起こらずナマズも暴れなかつた)場合の、計四通りがどれくらい頻度で起こったかをきちんと調べるのだ。私たちは、AとBの双方が起こった場合のみを記憶しやすく、AまたはBが起こらなかつた場合についてほとんど関心を払わないのである。といっても、今の例にあるような地震の前に動物(ナマズ)が異常行動をすることを否定しているわけではない。四通りの頻度を比較してどれくらい正確で 両者に関連があるかを言う必要があると言いたいのだ。まさに 空想から科学「」の手続きを経た推論を行うべきなのである。

(池内 了「思考バイアス」)

問九 日常生活においてバイアスが起こる場面は多い。次に挙げる例のなかで、人間はどのような状況になるか。一つ選び、起こりうる状況を条件を踏まえて説明せよ。

- (例) テレビ番組 コマーシャル 健康食品 心理テスト

(条件) ○状況を具体的に説明すること。
○八十文字〜百文字で書くこと。

③ 書籍のラッシュを三カ月前に多く、物事をインテリゲンシーと見做すようになった。そんな状況にあつては、書籍はもはやメディアとしての主役を降りたのだと考えるべきかもしれない。情報を流通させる速度や密度、そしてその量などに関しては、書籍と電子メディアでは既に比較にならない。しかし一方で、書籍の役割そのものがついでに消滅したとも考えにくい。おそらくは、このあたりで一度、僕らは「書籍とは何か」ということを再確認する必要があるだろう。それをしないまま、従来の方法で書籍のデザインを続けていくのはいかにも時代認識が甘いように感じるのである。

冷静に眺めてみると、紙という素材はメディアとして随分と重たい責任を担わされてきた。特に情報の流通速度がどんどん加速していく時代においては、紙はマテリアルである前に「無意識の平面」であつたといつていいかもしれない。万年筆で手紙を書くにも、プリンターで画像を出力するにも、まずは (b) ニュートラルな白い平面としての紙がそこにあつた。それは1対2という合理的な比率を持つ白い画面で、物質性はむしろ (a) シヤシヨウとされ、映像や文字を運搬する抽象的な媒介物として認識されていた。世界の三大発明として紙が与えられている名譽もまさにそういうニュートラルなメディアとしての性質に対してであつて、天然物に触れる喜びを指先に運んでくれる物性に対してではない。だからモニタースクリーンが常に身近に置かれるようになったとき、人々はその①素材としての性質や魅力を感じることなく「ペーパーレス」という言葉を口にしたのである。

そういう観点から考えると、②今日、紙はメディアの主役を降りて、実務的な任務から解放されたおかげで、再び本来の「物質」として魅力的にふるまうことが許されるようになったのではないかと。僕はそんなふうにも思うのである。

確かに書籍は、一定の情報を (c) ストックするメディアとしては、④大袈裟かもしれない。重いし、かさ張るし、汚れるし、風化もする。デジタルデータにして格納すればごくごく小さなメモリーの中におさまる程度の情報が、わざわざ書籍の大きさに仕立てられていくわけである。しかしながら情報は、大量にストックしたり高速で移動させたりするだけのものではない。

察するならば、③情報をいかにじっくりと味わえるかというポイントが重要になってくるのである。書籍に関していうならば、適度な重さや手触りを持った素材を用いて表現された情報の方が、小さく格納されて存在感の希薄になつた情報より人に心地よい使用感と満足をもたらせるかもしれないのである。

それはたとえ、④食物と人間の関係に似ているかもしれない。ひとつの卵をどうおいしく食べるかという問題に人類は膨大な知恵を使つてきた。それを調理する器具の多さ、レシピの多様さ、そしてそれをサブする方法や食器の多様さを想像していただきたい。卵を一度に二〇〇個調理できる装置や、五〇万個もストックできる倉庫があるということも有益なことに違いないのだから、それを味わおうとする「個人の食欲」にとつてはさしたる意味がない。ゆで卵を食べたいときには「鍋」を使つて人はそれを好みの固さにゆでる。25ろう。そしてエッグスタンドにそれを載せ、指先でせつせと殻をむき、優雅なソルトシェイカーで塩をかけた後に、銀の匙でそれをすくつて食べるはずだ。それが仮に面倒でも、そのように供された卵はおいしく味わえるに違いない。人間と情報の関係も似たようなところがある。電子メディアではなく紙を選ぶということは、その素材の性質や特徴を了解した上で、それを生かし、たしなみ、味わうということである。

僕は現在でも書籍というメディアが有効であると思うし、その効果は社会が考えているほど減退してはいないと考えている。あなたが30今、手にしているこの本にしてもそうだ。自分の頭から生まれ出た言葉の数々を、⑤エツランしやすいつい便利な場所においておけばいいのであれば、ウェブの中か、あるいはCDのようなものに格納するという方法もある。⑥僕はこうして本というメディアを選んでいく。それはこの情報を、紙に刷られた文字として味わっていたいただきたいからであり、手ごたえのある重量を持った物質として人に手渡したいからである。また、電車の中で鞆から取り出して気ままにページをめくつてもいいからであり、時間が経てば風化して骨董品になつてくれるのがいいと思うからである。もちろん、デザイナーとして、みなさんの手のひらの中でこの本が美しい雰囲気を出さうように工夫してもいい。

⑦情報は右から左へと移すのではなく情報を慈しむという観点で書籍の魅力を意識している。僕はノスタルジーに促されて紙を愛用しているわけではない。僕は電子メディアが嫌いではないし、電子メールがないともはや⑧コソクするほどに、既に情報技術とは深い関係を結んでしまった。だからこそ、紙メディアを用いる場合には、無意識にはなく、⑨はつきりとした意志を持ってこれと向き合いたいと思うのである。電子メディアの台頭のおかげで、紙はようやく本来の魅力的な素材としてふるまうことができるようになったのだ。

40 電子メディアが情報伝達の実質的な道具であるとすれば、⑩書籍は「情報の彫刻」である。だからこれからの書籍は、紙というメディアを選んだ以上、その物性がいかに生かされているかという評価にさらされることになるだろう。これは紙にとつては幸福な課題である。僕は今ではそういうつもりで書籍のデザインを行っている。

電子メディアもまたまだ進化の途上である。だから当分の間、電子メディアと書籍は、互いに影響を与えあい、並列にそれぞれの道を深めあつていくことになるだろう。

問十 あなたなら次の本をどのように作るか。後に挙げる(条件)を踏まえて説明せよ。

条件 1 傍線部⑥の筆者の考えに沿うこと。
2 作りたい本の「図録」を書き、説明をつけること。
3 その本を通してどのようなことを伝えたいのかを書くこと。
八十文字以上書くこと。

書名 「いつも一緒に」犬と作家のものがたり
内容 犬たちの忘れられない思い出を十人の作家が綴る随筆集。

(原 研哉 「情報の彫刻」)

4

② 次の文章をよく読んで、後の問いに答えよ。

ほぼ一世紀前、思想家ニーチェは、著者と読者について次のように述べていた。

① 読書する暇つぶし屋を私は憎む。あと一世紀も読者なるものが存在し続けるなら、やがて精神そのものが憑奥を放つようになるだろう。誰もが読むことができるという事態は、長い目で見れば、書くことばかりか、考えることまで腐敗させる。「ツアラトウストラはこう言った」中の「読むことと書くこと」から)

ニーチェのこの言葉は、少数の著者が多数の読者を啓蒙し教化する、という活字書物文化の特質を、^a 擁護したものと考えられる。ニーチェが評価するのは、「血をもって」全身全霊で「書かれたもの」だけであり、暇つぶしの気楽な読書態度では、その「書かれたもの」の精神を読み解くことはできないのである。

ところで、本の書き手を表す著者という言葉は、英語ではオーサーであり、それは権威(オーソリティー)という言葉と深い関係にある。そして、「著者」という権威の成立は、グーテンベルクの活版印刷術の成立以降である、ということがしばしば語られる。

活版印刷というメディアとともに、「著者性」というものが発生したのだとすると、インターネットを中心とした電子メディアが、大きな位置を占め始めている今日、^②「著者」のあり方が、大きな変容を被ってきていることは十分に考えられる。ここにおいては、従来の、権威者の一方的な情報発信と、受動的に享受する多数の読者という上下構造が消失し、著者の権威性の崩壊とも言うべき事態が発生している。誰でもが簡単に「著者」となり得る構造である。

インターネットにおける著者と読者(情報発信者と受信者)の問題は、目下のところ、混乱を極めてるように思われる。一方では、これまで泣き寝入りせざるを得なかつた者が、発言手段を得て、不正を告発することができる。他方では、十分な論拠も証拠もないまま、一方的意見をホームページに掲載したり、匿名性を利用した個人の誹謗中傷がまかり通ったりしている。一人の勇氣ある発言が不正をたすこともあれば、その発言が、個人やコミュニティや企業を崩壊させることもある。

ともかく、これまで一般の個人が持っていた、ビラやミニコミ、投書欄への投稿などという発言手段に比較して、^③ インターネットの持つ力は圧倒的である。情報発信の総量は、実は、メディア形態の技術的制約によって決定されている。書物文化、あるいは、TV・ラジオ、新聞、雑誌などのマス・メディアにおける著者・情報発信者数は、構造上少数たらざるを得なかつた。

しかし、インターネットというメディアに特徴的なのは、情報発信者がどれほど多数であろうとも、情報の非物質性、デジタル情報に特徴的な光速に近い検索能力によって、必要な情報が瞬時に取り出せる、という点にある。もし、一億人の日記を紙メディアで集積したとしたら、目的の情報を探し当てることはほぼ不可能である。ここでは、情報量の過度な増加は、そのまま情報の有用性の減少につながる。【A】

だがインターネットでは、無限に近い不必要な情報に関与することなく、適切な検索手法によって、必要な情報だけを的確に抽出することができる。【B】

従来のメディアでは、個人が公に対して発言するには、さまざまな困難や編集者らによるチェックなどが伴っていた。良くも悪くも、^④ この距離こそ、思いを思考に、一面的な思念を十分吟味された意見へと練り上げる。【C】

しかし、インターネットにおいては、気楽に書き連ねた文章を、自分のコンピュータに保存することと、ネット上に公開することの差は、二、三のキー操作の差にすぎない。従来のいかなるメディアとも異なり、インターネットでは、「発想」と「発表」との間の落差がほとんど存在しない。あるいは、「自我境界」が曖昧化、拡大化し、自己と世界が、いわば「短絡」してしまうのである。ここでは、プライベートとパブリックの境が溶け落ちる。【D】

さまざまな情報とともに、何億もの個人のととりとめもない思いや理解や誤解が、ネット上にあふれる。^⑤ これらは、呼び出さなければ無言のままにとどまっているが、ひとたび検索の網にかかれれば、強大な力を発揮することになる。【E】

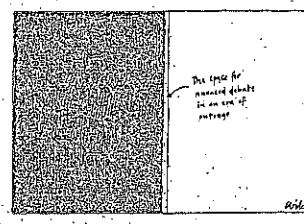
ニーチェの予言から一世紀。結果は、誰もが読者であり続けただけでなく、今後は、誰もが著者になる時代となるだろう。誰もが公表できるという事態は、^⑥ いったい今度は何を腐敗させてしまうことになるのだろうか。

問八 傍線部⑥に関連した次の説文を読み、社説では何が腐敗していくと考えているか。理由も含めて百五十字以内で書きなさい。ただし、百字に満たない場合は採点の対象にはならない。

思考の陰影感じる世界へ

The space for advanced debate in an era of outrage
 第一世紀の時代(1) ニュースある世界(2) 考えある世界(3)

By Cathy Wilcox



「読書する暇つぶし屋を私は憎む。あと一世紀も読者なるものが存在し続けるなら、やがて精神そのものが憑奥を放つようになるだろう。誰もが読むことができるという事態は、長い目で見れば、書くことばかりか、考えることまで腐敗させる。」(『ツアラトウストラはこう言った』中の「読むことと書くこと」から)

ニーチェのこの言葉は、少数の著者が多数の読者を啓蒙し教化する、という活字書物文化の特質を、擁護したものと考えられる。ニーチェが評価するのは、「血をもって」全身全霊で「書かれたもの」だけであり、暇つぶしの気楽な読書態度では、その「書かれたもの」の精神を読み解くことはできないのである。

ところで、本の書き手を表す著者という言葉は、英語ではオーサーであり、それは権威(オーソリティー)という言葉と深い関係にある。そして、「著者」という権威の成立は、グーテンベルクの活版印刷術の成立以降である、ということがしばしば語られる。

活版印刷というメディアとともに、「著者性」というものが発生したのだとすると、インターネットを中心とした電子メディアが、大きな位置を占め始めている今日、「著者」のあり方が、大きな変容を被ってきていることは十分に考えられる。ここにおいては、従来の、権威者の一方的な情報発信と、受動的に享受する多数の読者という上下構造が消失し、著者の権威性の崩壊とも言うべき事態が発生している。誰でもが簡単に「著者」となり得る構造である。

インターネットにおける著者と読者(情報発信者と受信者)の問題は、目下のところ、混乱を極めてるように思われる。一方では、これまで泣き寝入りせざるを得なかつた者が、発言手段を得て、不正を告発することができる。他方では、十分な論拠も証拠もないまま、一方的意見をホームページに掲載したり、匿名性を利用した個人の誹謗中傷がまかり通ったりしている。一人の勇氣ある発言が不正をたすこともあれば、その発言が、個人やコミュニティや企業を崩壊させることもある。

ともかく、これまで一般の個人が持っていた、ビラやミニコミ、投書欄への投稿などという発言手段に比較して、インターネットの持つ力は圧倒的である。情報発信の総量は、実は、メディア形態の技術的制約によって決定されている。書物文化、あるいは、TV・ラジオ、新聞、雑誌などのマス・メディアにおける著者・情報発信者数は、構造上少数たらざるを得なかつた。

しかし、インターネットというメディアに特徴的なのは、情報発信者がどれほど多数であろうとも、情報の非物質性、デジタル情報に特徴的な光速に近い検索能力によって、必要な情報が瞬時に取り出せる、という点にある。もし、一億人の日記を紙メディアで集積したとしたら、目的の情報を探し当てることはほぼ不可能である。ここでは、情報量の過度な増加は、そのまま情報の有用性の減少につながる。【A】

だがインターネットでは、無限に近い不必要な情報に関与することなく、適切な検索手法によって、必要な情報だけを的確に抽出することができる。【B】

従来のメディアでは、個人が公に対して発言するには、さまざまな困難や編集者らによるチェックなどが伴っていた。良くも悪くも、この距離こそ、思いを思考に、一面的な思念を十分吟味された意見へと練り上げる。【C】

しかし、インターネットにおいては、気楽に書き連ねた文章を、自分のコンピュータに保存することと、ネット上に公開することの差は、二、三のキー操作の差にすぎない。従来のいかなるメディアとも異なり、インターネットでは、「発想」と「発表」との間の落差がほとんど存在しない。あるいは、「自我境界」が曖昧化、拡大化し、自己と世界が、いわば「短絡」してしまうのである。ここでは、プライベートとパブリックの境が溶け落ちる。【D】

さまざまな情報とともに、何億もの個人のととりとめもない思いや理解や誤解が、ネット上にあふれる。これらは、呼び出さなければ無言のままにとどまっているが、ひとたび検索の網にかかれれば、強大な力を発揮することになる。【E】

ニーチェの予言から一世紀。結果は、誰もが読者であり続けただけでなく、今後は、誰もが著者になる時代となるだろう。誰もが公表できるという事態は、いったい今度は何を腐敗させてしまうことになるのだろうか。

孫子荆、年少時、欲隱語。王武子、枕石漱流、誤曰、漱石、枕流。王曰、流可枕、石可漱乎。孫曰、所以枕流、欲洗其耳。所以漱石、欲礪其齒。

〔世説新語〕

Cについて

問一 文中の「少」と同じ意味を持つ語句を選び、記号で答えよ。
1 少佐 2 僅少 3 少女 4 減少 5 少量

問二 傍線部①の意味を簡潔に答えよ。

問三 文中の「礪」に当てはまる文字を選び、記号で答えよ。
1 未 2 猶 3 須 4 盍 5 当

問四 傍線部②の読みと意味を答えよ。

問五 孫子荆の性格の説明として最も適切なものを選び、記号で答えよ。

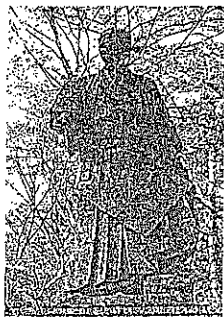
- 1 常識にとらわれて自由なところが受けられない人物。
- 2 相手をびつくりさせることに生きがいを感じている人物。
- 3 間違いを指摘されていることに気づかない愚かな人物。
- 4 頭の回転が早く、相手をたますことがうまい人物。
- 5 プライドが高く、自分の負けを認めようとしない人物。

問六 この話に関係するペンネームを持つ小説家の作品を「」を選び、記号で答えよ。

- | | | |
|--------|--------|-------|
| 1 山月記 | 2 羅生門 | 3 三四郎 |
| 4 暗夜行路 | 5 細雪 | 6 五重塔 |
| 7 こころ | 8 人間失格 | |

D

野中兼山、土佐人。世仕、国侯嘗来江戸、及帰期也、致書郷人曰、土佐無物不有、自江戸齋帰、惟有蛤蜊一艘耳。海路幸無恙、以帰日、饋之。衆以為嘗異味、計日待帰。既至、則命投其所、漕於城下海中、不余一箇。衆怪問、兼山笑曰、此不独饋諸卿、使卿子孫亦飫之也。



野中兼山像(堀金山公園)

Dについて

問一 傍線部①の内容に当たる部分の、終わりの三文字を抜き出せ。ただし句読点は含めない。訓点不要。

問二 傍線部②を口語訳せよ。

問三 傍線部③の具体的な説明を、空欄を補って完成させよ。人々は野中兼山の「ア」(「イ」)にした。

アには「遠慮」の意味を入れよ。

イには当てはまる語を次の中から選び、記号で答えよ。

- 1 元服
- 2 征服
- 3 被服
- 4 心服
- 5 頓服

問四 野中兼山なら次の課題の解決にどう対応するだろうか。条件を踏まえて述べよ。

(条件) 八十字以上書くこと。

理由を述べること。

地域の店が軒並み閉店してしまい、商店街に活気がなくなってきた。

〔先哲叢談〕 剛修

其遠慮。

□ 次の漢文を読み、下の問に答えよ。

A 転禍為福。

B 良薬苦口。

C 歲月不待人。

D 行百里者半九十。

E 百聞不如一見。

F 必有得天時者。

G 先即制人、後則為人所制。

H 君子欲訥於言而敏於行。

I 天下莫柔弱於水。

J 無見其利而不顧其害。

K 及時当勉励。

L 過猶不及。

M 未知明日事。

N 不知老之將至。

問一 二重傍線部ア・イの読みを送り仮名も含めて答えよ。

問二 次の書き下し文に従って、E・Kに返り点を付けよ。送り仮名をつける必要はない。

E 百聞は一見に如かず。

K 時に及びて当に勉励すべし。

問三 C・I・Mを書き下し文にせよ。

問四 Hに用いられている置き字をすべて抜き出せ。

問五 次の内容の漢文を選び、記号で答えよ。

- 1 物事はすべてほどよさを保つのがよい。
- 2 年をとるのも忘れて物事に熱中している。
- 3 効き目があるものは簡単には受け入れにくい。
- 4 最も素晴らしいのは柔軟な生き方である。
- 5 不幸がうまく幸福になるようにとり計らう。

問六 Gと同じ内容を表す言葉を次の中から選び、漢字に直して答えよ。
アクセントウ キシカイセイ オンコチシン
セントヒツシヨウ ウオウサオウ

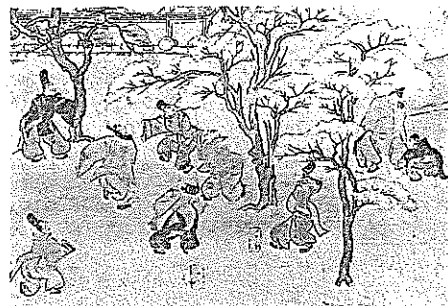
問七

次の文章と主張がほぼ合致しているものを記号で答えよ。

① 高名の木登りといひしをのこ、人を撻て、高き木に登せて梢を切らせしに、いと危ふく見えしほどは言ふこともなくて、降るときに、軒たけばかりになりて、「過ちすな。心して降りよ。」と言葉をかけはべりしを、「がばかりになりては、飛び降るとも降りなん。いかにかく言ふぞ。」と申しはべりしかば、「そのことに候ふ。目くるめき、枝危ふきほどは、己が恐れはれば申さず。過ちは、やすき所になりて、必ずつかまつることに候ふ。」と言ふ。

② あやしき下藤なれども、聖人の戒めにかなへり。輔も、難きところを蹴いだして後、やすく思へば、必ず落つとはべるやらん。

(第一〇九段)



殿殿に興ずる公卿たち (『年中行事絵巻』)

問十一 次にあげるのは「山月記」のもとになった「人虎伝」の一節である。二つを比較して、作者 中島敦がこの小説で何を描こうとしたのかについて論ぜよ。ただし次の条件を満たすこと。

- 1 「人虎伝」と「山月記」との違いを述べること。
- 2 百字以上書くこと。

※李景亮(中唐の人) 作 「人虎伝」 李徴が虎になった理由を振り返る場面。

〔読み方〕

惨之を覽て驚きて曰はく、「君が才行、我之を知れり。而も君此に至れるは、君平生自ら恨むこと有る無きを得んや。」と。

虎曰はく、「若し其の自ら恨む所を反求せば、則ち吾亦た之有り。定めて此に因るを知らざらんや。吾故人に遇へば、則ち自ら匿す所無きなり。吾常に之を記す。南陽の郊外に於いて、嘗て一嫗婦に私す。其の家窃かに之を知り、常に我を害する心有り。嫗婦は、是に由りて再び合ふを得ず。吾因りて風に乘じて火を縱ち、一家数人、尽く之を焚殺して去る。此を恨みと為すのみ。」と。

〔通釈〕

惨は、この詩を読んで驚いていった、「君の才知と品行は、私はよくわかつていた。しかし、君がこのようになってしまったことについては、君は日ごろ自身で残念に思わないではいられない。」と。虎はいった、「もし私が自身で後悔していることを振り返って考えるならば、やはり(思い当たるふしが)あるのだ。きつとこのせいに違いない。私は旧友の君に出会ったのだから、自分から隠しだてすることはない。私はいつもこのことをよく覚えてる。(以前)南陽の町の郊外で、夫に先立たれたある女性と人知れず交際したことがあった。(ところが、)その家人がひそかにそれに気づき、いつも私に危害を加えようと企んでいた。その女性は、それによって再び会うことができなくなってしまった。(癪にさわった)私は、それで(ある日)風の強いのにつけこんでその家に火を放ち、一家数人をすべて焼き殺してそこを立ち去ったのだ。(今は)このことが悔やまれてならない。」と。

〔二〕

二〇一六年は、夏目漱石生誕百五十年、没後百年の節目にあたる。作品のほとんどは朝日新聞に連載された。「こころ」は一九一四年四月から八月にかけて掲載されたが、発表百年を記念して二〇一四年には当時のままのかたちで掲載された。現在は「吾輩は猫である」が連載中である。

次にあげるのは「こころ」連載と並行して企画された「リレーおびにおん 漱石と私」の一節である。読んだ後の問に答えよ。

テゼインを専門にしているためか、小説を讀んでみて、住まひの描写が目がいきます。

漱石は、聞取りを心の投影に巧みに使いました。「こころ」の「下」先生と適齋「は室内劇です。先生は友人のKを自分の下宿先に呼びました。8畳間で机を二つ並べようと先生は考えますが、Kは狭くても一人がいい、と隣の4畳を選びます。先生が自室に行くには、Kの部屋を横切らなくてはなりません。先生とK、下宿先の奥さんと御嬢さん、4人の人間関係は部屋の関係とどこにも展開していきます。

先生がKの部屋を通り抜けるとき、それまでKと話していた御嬢さんが、先生の顔を見て笑う場面があります。先生は聞けませぬ、なぜ笑われたのか、先生は聞けませぬ。先生とKの部屋が離れていたから、疑心暗鬼の種は生まれなかったでしょう。同じ部屋に布団を並べていられは、相手の心の裏を眺もつとせず、素直に気持ちを伝えられたのではないのでしょうか。実に見事な聞取りです。Kはもう寝たのだろうか、と先生はあすの向こうの気配を読み取ろうとします。微妙な隔たりが、2人の気持ちに齟齬を生み、物語に気味の悪さを与えます。

テゼイン評論家 柏木 博 二〇一四年七月九日付

I 筆者は小説の「どんな点」に注目しているか、またそれが物語にどのような効果をもたらすと考察しているか、簡潔に説明せよ。

II 「こころ」の小説としての「上手さ」を説明せよ。

- 1 一〇〇字〜二〇〇字で書けよ。
- 2 文中から根拠をあげること。①・②の文章、また出題部分以外に学習したところからあげても構わない。